

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	地理学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部教授		野中 健一 印		
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文		個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同	
研究課題名	展示施設から捉えた人とクジラの民族誌的研究：太地町立くじらの博物館の事例				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科 地理学専攻 博士課程前期課程 2年		田中 彩貴 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2007		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本論考は、和歌山県太地町立くじらの博物館(以下、くじらの博物館とよぶ)における捕鯨の歴史ならびに飼育鯨類が、博物館スタッフによってどのように展示され、そして入館者によってどのように見られているのかを明らかにした。この作業を通じて、筆者はくじらの博物館が語る捕鯨には、太地町において戦略的本質主義として重視される「クジラの町」としての古式捕鯨や「クジラ」の飼育展示と、国際問題としての捕鯨との重層性があるという点を指摘した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[太地町] [くじらの博物館] [まなざし]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本論考では和歌山県太地町くじらの博物館における鯨類ならびに捕鯨の展示と、それらの資料をめぐる交差するまなざしについてみてきた。

筆者は本稿の課題として、第一に太地町において捕鯨業と観光産業が結びついてきた過程、第二にその過程において博物館が担ってきた役割、第三に現在の博物館の展示における特徴を明らかにしたうえで、現在くじらの博物館に集まる人々が展示資料をどのように捉えており、それぞれのまなざしはどのように交差しているのかについて考察した。

第一の点に関しては、太地では、20 世紀以降、捕鯨業の衰退期に当時の行政が捕鯨業の継続を図る政策を示してきた。捕鯨業を重視する町の姿勢は、捕鯨に関する史跡の整備などの公共事業にも見受けられた。1950 年代以降に文化財の整備など町の公共事業においてクジラとの結びつきが強調され、他の町にはない太地町の特徴、すなわち「クジラの町」であることを町内外に向けて発信していくことが目指された。こうした情報発信において、くじらの博物館は中心的存在になることが想定されていた。同時に、鯨類を飼育展示し、観光客を呼び寄せる観光施設となることも意図されていたことが分かった。

第二の点に関しては、町の歴史を後世に伝えることと、観光の中心施設なることが求められるなかで、くじらの博物館は町政だけではなく、鯨類に対する国内外の世論、ならびに博物館や動物園水族館などのあり方をめぐる変化に影響を受けながら活動してきた。開館後 1970 年代まで、博物館には入館者数が多く、捕鯨に関する資料も増えてきた。1980 年代になると近県に海洋生物を扱う施設が設立され、観光客の足が遠のいたため、入館者を取り戻そうと動物の展示に積極的に取り組んでいった。これにより 1980 年代後半から一時的に入館者数が増加したものの、当時の町内における捕鯨問題への関心との齟齬が生じた。つまり、博物館では近県に新しく設立された水族館などへの対応として動物展示に力を入れてきたのに対し、町内では捕鯨存続への危機感から捕鯨擁護運動に力が入れられたという関心のズレがみられた。現在は、「鯨の民の鯨による町作り計画」という地域再生計画の一端として、くじらの博物館の再建が図られ、飼育部と学芸部の活動、とくに学芸部に対しては捕鯨に関する展示に改善が求められている。

次に、第三の課題であった現在の博物館の展示における特徴については以下の 7 点を指摘した。すなわち、(1) 鯨類のショーでは生態の説明に重点が置かれていること、(2) 飼育鯨類とのふれあいが可能なこと、(3) 飼育鯨類が「クジラ」であることが強調されていること、(4) 博物館本館ではセミクジラの資料が顕著であること、(5) 飼育動物・本館の資料が捕鯨の産物であること、(6) 鯨類の生態に比べて捕鯨の解説が少ないこと、(7) 捕鯨の展示については古式捕鯨に重点が置かれていること、である。

そして、くじらの博物館に集まる人々は展示資料をどのように捉えており、それぞれのまなざしはどのように交差しているのか、について、筆者は飼育下の鯨類と、捕鯨の捉え方の相違に注目した。

まず、飼育下の鯨類では、博物館関係者と入館者のあいだで「クジラ」をどのように分類するかという点に認識論的な違いがみられる。捕鯨の町、クジラの町としてクジラにこだわる太地町では、ハンドウイルカやシャチやゴンドウも「クジラ」として当然視されている。だが、くじらの博物館への入館者は飼育下の鯨類に対する明確な区分をおこなっている。ハンドウイルカに代表されるように吻の長いハクジラ、すなわちイルカは、ショーならびに飼育環境下で見慣れている。このイルカに対して、シャチは海では「獐猛」、「怖い」というイメージがもたれているが、飼育下では「かわいい」ないし「カッコイイ」として人気を集めている。

研究成果の概要 つづき

イルカやシャチが肯定的に受け入れられるのに対して、クジラとして紹介されているゴンドウは、入館者から「小さい」と拍子抜けされる傾向がある。これは、入館者の多くがクジラに対して「大きい」、「雄大」というイメージを持っていて、「飼育されているクジラ」が想像されていないためである。そのため「どれがクジラ？」という質問が飼育スタッフに寄せられる。質問を受けるスタッフは、目の前にいる生き物そのものに注目してもらいたいと思いつつ、入館者の関心が「イルカ」と「クジラ」の分類にとどまる場合は動物の生態に関する話を控えている。つまり、飼育スタッフのなかには、自らの鯨類の見方と、施設における展示という行為において「クジラ」を説明することとのあいだにズレを感じながらも、博物館において飼育鯨類とかかわっている。

このような個人のなかの鯨類に対する異なる考え方は、入館者にも見られる。たとえば、入館者の中には「ショーを見て楽しみたい」と、「鯨類に負担がかかってほしくない」という矛盾したふたつの感情を抱える人がいる。これは、一方では鯨類という普段なかなか見ることができない生き物を見てみたいという好奇心と、もう一方では演技することによって鯨類に苦痛が与えられることに対する嫌悪感である。このように相反する感情を持ちながら、ショーをする鯨類をみる入館者もいる。

次に捕鯨の捉え方については、捕鯨に対する意味づけがその違いに表れている。捕鯨の展示には「太地町の捕鯨の歴史」としてくじらの博物館で取り上げていきたい町政や町民の方針があり、学芸部もその方針に同意を示している。だが、入館者のなかには博物館の捕鯨展示を、「捕鯨問題」、「現代の捕鯨」として考え、必ずしも「太地町の捕鯨」として限定的に捉えていない人もいる。したがって、「クジラに関する問題全般」を取り上げてほしいという入館者の声も存在するのである。言い換えれば「太地町の歴史としての捕鯨」は、入館者によって「現代の国際的な捕鯨問題の一端としての太地町の捕鯨」と読みかえられる。その結果、今日の問題としての捕鯨問題の展示が入館者から要望されるのではないだろうか。

つまり、「町の歴史としての捕鯨」と、「国際問題における 1 つの町の捕鯨」という微妙な差異が、「私の生活にかかわる捕鯨」か、「私の生活とは遠いが現代的な問題としての捕鯨」かという捕鯨に対する視点の違いを生み出している。そして、博物館のスタッフとして太地町に住み始めた者は「私の生活にかかわる捕鯨」か、「私の生活とは遠いが現代的な問題としての捕鯨」かという捕鯨に対する自らの視点に、揺らぎを感じている。

以上のように、展示資料をめぐるまなざしという点から見ると、第一に、飼育鯨類の捕らえ方については、鯨類を町の資源やシンボルか、飼育下で見る生き物か、それとも生態学的に説明するかという異なった視点があること、第二に、捕鯨の捉え方については、インフォーマントと捕鯨との距離感により、「生活の一部としての捕鯨」、「国際問題ないし環境問題としての捕鯨」、そして「国際問題ないし環境問題であったが、生活の一部となりつつある捕鯨」というまなざしが交差していることを指摘した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④「和歌山県太地町立くじらの博物館が語る捕鯨 — 展示資料をめぐるまなざしの交差 —」日本文化人類学会研究懇親会(平成20年3月22日、於：成城大学)